

貧乏「ケチ」レポート

こんにちは、コバタカです。

このレポートでは、

僕、お掃除屋にして、

月収500万の収益を得るまでの仕組みを作ったこと。

そして、それに至るまで、

お金に対しての困窮した話を記したいと思います。

では、ここから始まりです。

2020年現在、僕は50代半ば、掃除屋である。

だが就職し、3度の転職を繰り返し、

脱サラしてフランチャイズで独立。

だが、

僕は、月に500万円以上の収益を得る仕組み。

さらに、その収入は
一切自分が動くことなく得られる収入の仕組みである。

僕は自分で事業を始めたのだ。
お掃除屋にして、僕はその世界に行くことができた。

それとは対照的に

次からは、
貧乏で貧乏でどうしようもなかったことを書き記していく。

最初に言っておこうと思うが、、、
貧乏だと全てが壊れる
可能性が高いということ。

特に僕が育った家庭では全てが崩壊していたし、
負のデフレスパイラルみたいなものが渦巻いていた。

それをここに記していこうと思う。
僕は自由を4つに分類している。

- ・金銭的な自由
- ・精神的な自由
- ・時間的な自由
- ・身体的な自由

貧乏。

すなわち、金銭的な自由が失われているというのは、
全ての自由を失うことを意味する。

お金がないだけ。

たった1つの自由が消滅するだけで、
全ての自由を阻害する。

そして、両親は

お金を得ることのできる知恵も持ってない。

全てを僕は失った。

それを僕の生々しい経験とともに記していこうと思う。

僕は1965年の冬に生まれた。

東京都下の小さな病院で生まれたらしい。

幼稚園に上がる前には、
僕は父を恐れていた。

父に殴られることが多かったのだ。
お父さんが怖くて怖くて僕は仕方なかった。

父の身長160センチ、服は2Lサイズあった。
僕は幼稚園児にも満たない子供だ。
怖くないわけがない。

ちょっと逆らったらぶん殴られる。
だからこそ言いたいことも言えない。
ひたすらに恐怖感を感じていた。

食べたいものも食べたいと言えない。
欲しいものを欲しいとも言えない。
わがままも言えない。

僕は会社に働きに行き、
自分で稼ぐことができるまで、
外食に行った時に、
好きなものを頼むというのは「悪」のような感情を感じていた。

安いものを頼まなければならない。

そんな強迫観念を幼少の頃から感じていたのだ。

それは、

大手外食チェーンすかいらーくに行った時に、

大盛は贅沢だ。

と言われたことに起因する。

すかいらーくはファミレスチェーン店だ。

だが、そのように言われるのだ。

だからこそ怖いのだ。

両親にこのピザ頼んでいい？

と頼むと怒られると思っているからだ。

だからこそ頼むこともできない。

そこで僕は、

「素直にならないことは善である」と学習した。

素直に両親に頼むと、怒られる。

なので、常に素直にならずに、我慢する。

そんな価値観になった。

それが脳内に渦巻いていたために、

僕の無意識は常に素直じゃない価値観になった。

僕は幼少、少年期に、

素直じゃない子供時代を過ごした。

そして、

それは多感な子供時代の多くのものを破壊したように思える。

元をたどれば、

貧乏。

やはり、これに尽きるのだ。

貧乏であり、そして、

両親は異常にケチだった。

僕が最もショックだったのは、

僕は大盛を頼むだけで異常なくらい怒られて、
涙を流しているのに、

父は時計を買ったり、カメラを買ったり、趣味にお金を使っていたことだ。

貧乏な家庭だ。

そんなに膨大な額をつぎ込んでいたわけではない。

だが、時計を買うなら、

大盛くらい頼んでもいいじゃないかと思った。

それは子供心にショックだった。

さらにそれに拍車をかけたのは、

僕が友人の家に遊びに行ったときだ。

その家のお父さんは、

非常に子供との時間を大切にするような方で、

遊びに行ったら、

僕と野球をしたり、人生ゲームをやってくれたりしてくれた。

そして、「お腹空いたか？」

と言われ、

ファミレスに連れて行ってくれたりした。

僕はその時泣いた。

あまりにも自分の家との差に涙が出たのだ。

友達のお父さんは、

赤の他人の僕のためにお金を払って食事を食べさせてくれた。

正直この時は、

申し訳なさすぎて、どうしていいかわからなかった。

たった1000円もしない食事だ。

だが僕はその1000円に異常なまでの罪悪感を感じていたのだ。

と同時に本当に嬉しかった。

けど、やはり寂しさを感じなかったといえは嘘になる。

けど、僕はさみしさのような弱気の感情は無視し続けた。

- ・両親に対する寂しさ。
- ・悲しさ
- ・親に大切にされたいという思い
- ・友達と一緒にのおもちゃを買って欲しいと思う心
- ・どこかに連れて行って欲しいと思う感情

上記のような感情は全て封印した。

僕は両親と一緒にいると、
心の底から笑ったことはない。

それは母と居ても父と居ても同様だった。

母は今は仲は悪いわけではないが、
甘えることができるか？
と言われると厳しいものがあるし、

どうやっても強がってしまう。

特に父といると

異常なまでの不快感を覚える。

一緒に空間を共にしたくないのだ。

笑うなどもってのほかで、基本的に関わりたくはない。

もしこのレポートを親の立場の人で見ている人がいるなら、

強く言いたいのは、

きちんと子供を愛してあげてくれということだ。

それは口で愛しているよ。ということではない。

お金を子供にかけてあげなさい。

ということでもない。

僕のように、ひねくれた子供にしてあげないでくれ。

ということだ。

素直になるように育ててあげてくれ。

自分の感情を無視して、

言い訳だらけのような人生を歩むことにしてしまったら、

場合によっては取り返しがつかない。

僕は運良く、

事業をするという立場になることができ、

38歳にして

お金に関しては、困らないと確信するまでに至ることができた。

そして、魅力的な人間とたくさん会うことができるようになった。

世間では、

お金を持っている人は、「悪」だと捉える人が多いが、

実際はそんな典型的な「悪」人は少ない。

そもそも

起業家としてお金を得るためには、

人に価値を提供しなければならない。

宝くじに当たったわけではないのだ。

起業家になると、

僕は人間としての魅力はどんどん増すと思っている。

価値を提供するといったマインドになるからだ。

僕はそういった人からどんどん学んだ。

そうしていたら、

僕自身も余裕が生まれた。

お金の余裕ができて、

さらに時間にも余裕ができて、

そしてさらに人間力が高く、

人との時間を大事にして、

かつ自分の仕事に対するプロ意識が高い人間とたくさん会うことができた。

それにより、

僕の貧困なるケチな価値観は、

人に常に価値を与える価値観に移り変わった。

まだまだではあるが、

常に人に価値を与えることは基本だなという思考に至っている。

話を戻そう。

僕の子供時代を語る上で、

「お金」無しに語ることはやはりできない。

僕にお金があまりにもなかったために、

- ・素直になれず
- ・貧乏である自分を無理やり肯定し
- ・ケチであることに誇りを感じて
- ・ケチなことにより集団から孤立し
- ・孤立しても別にいいしと突っぱね
- ・常に人を馬鹿にするようになったり

するのだ。

本当に様々なものを失ったんだと感じる。

まず素直になれない。

を深く掘っていこうと思う。

まず、両親はケチなのだ。

圧倒的にケチであった。

最も安くするためにはなんでもするのが、

僕の中での母のイメージだ。

もちろん、

安くする。

その思考回路がダメなわけではない。

問題は、

時間を大量に使っても安くするといった価値観だ。

何日も調べて、安くしたりする。

安い卵を買いに、隣町のスーパーまで行く。

そんな姿を毎日見たために

僕もどんどんケチになってしまった。

そして、その価値観だと、

僕自身ケチ以外許せなくなるのだ。

本当に価値観というのは恐ろしい。

今だから思うが、

ケチははっきりいって金持ちとは縁遠い。

縁遠すぎる。

ケチな価値観だと貧乏からは一生抜け出せない。

安い卵を買いに行っても200円が100円になるだけだ。

その100円に何の価値があるだろうか？

ケチには限度がある。

ケチというのは、

難しく言えば、

支出を減らすということだ。

だが、支出を減らすのは当然限度がある。

支出を減らすにしても、

我が家は儉約家ではない。

ただのケチだった。

儉約家は僕も賛成だ。

だけど、ケチは反対だ。

金持ちは収入を増やすことを考える。

当時から僕はこれを知りたかった。

当時からこの考えを知り、

学びを得ていたら10代で億万長者になれたと思う。

(知ることができたのもラッキーだったけども。)

ちなみにケチとコスパを追い求めることは違う。

コスパ。

コストパフォーマンスを追い求めるというのは、

総合的な人生の満足度を上げるということだと僕は思う。

お金を大切にしすぎると、

我が家の様にケチになってしまう。

4つの自由の、

金銭的、精神的、時間的、身体的。

あらゆる価値観から満足度が高くなる様にする。

それが僕にとってのコスパである。

具体的な事例を出すと、

僕の家には空気清浄機がある。

そして僕は重度の鼻炎である。

僕は空気清浄機はかなり高いものを購入しているが、

それは鼻炎だからだ。

空気清浄機を導入することで、

家でくしゃみをすることは激減し、

それにより体調は劇的に良くなった。

そして掃除をする回数も減らすことができる。

くしゃみというのは、

かなりの体力を消耗する。

くしゃみするだけで、

すごく疲れて寝る。

仕事にもならないし、
受験勉強している受験生などであれば、
確実にモチベーションの妨げになる。

そして寝てしまったら、
寝ている間にホコリが飛んでいるから、
それをまた吸って、
起きた時から体調が悪いなんてこともある。

しかしそれはすぐに解決することができることだ。

だったらそれはお金を払ってツールにやらせてもらおう。

人類はテクノロジーを発展することで、
手足を拡張してきた。
せっかく掃除をしてくれる手足がいるんだ。
喜んでお金を払おう。

鼻炎グッズを下記記事では紹介しているから、
ぜひ見て欲しい。

<https://hp-mydo.com/good-goods/>

この様なグッズには、
いくらお金を払ってもコスパがいいと僕は思っている。

すぐに劇的な変化が訪れるからだ。

しかしながら、

実際のところは、

僕のケチな根源なる価値観を破壊するのは容易ではなかった。

今でこそ、こんな簡単に

空気清浄機や掃除機を人に勧めているが、

昔だったらこんな素直なことはできなかった。

正直自分で買うのも自分と向き合うことができないと買えないのだ。

だってお金がかかるから。

ケチな人間にとって、お金の優先度は最も高いのだ。

だからこそあらゆるチャンスを逃す。

素直に

「空気清浄機が欲しいです」

なんてことは言えないのだ。

鼻炎で苦しいです。

とも言えない。

別に平気だし。

と常に強がる。

笑えるでしょう？

「たかが空気清浄機じゃん。それでなんでそんなに語っているの？」

と思う方もいるだろう。

それぐらい価値観の影響は強いということを理解して欲しい。

ケチな価値観にコミットしていたら、

やはりあらゆることがケチになってしまう。

欲しいものは欲しいと言おう。

それに金がかかるなら捻出すればいい。

それだけの話だ。

金を大切にすゝあまり、
お金が寝ていたら意味がない。

お金は単なる手段にすぎない。

実際に空気清浄機を導入してみても思うが、
これはどの鼻炎の家庭にも全ての部屋に導入したほういいと断言で
きる。

ケチだと本当に機会損失が尋常じゃない。

それは超ケチな価値観と超金持ちの価値観。
両方に触れてきたからこそ分かることだ。

超金持ちの人の価値観は世間一般とは全く異なる。

4つの自由を高めるためには、
お金はどんどん使っていく。

だがそれは贅沢をすることではない。

きちんとした教育をするお金持ちは、
子供にきちんとした形でお金を使う。

決しておもちゃを無限に買ってあげるようなことはしない。
子供に幅広い価値観を与える。

そういった教育をする。
それに関しては今日は詳しくは語らないが、
ケチな価値観は一切ない。

それだけは言える。

で話を戻そう。
空気清浄機を導入するなんて我が家にとっては、
超贅沢なことだった。

だからこそ僕はそんな贅沢なものが欲しいなんて
素直な感情は出るはずもなく、
鼻炎で苦しみ続けた。
だが、その苦しみさえも、
「これが当たり前だから」

と自分に言い訳を永遠にしていたことに

はじめて気づいた。

どんどん素直になれないことは加速していき、
親に頼ることは僕の中で完全なる「悪」になった。

それは同時に僕の性格の歪みを生んだ。

他人で親に頼っている人を見ると、
気に入らない感情が沸き起こってしまったのだ。

具体例を出すとわかりやすいので、
出そうと思う。

小学4年生の時である。

僕の家は、
駅から25分離れていた。

その日は大雨が降っていた。

僕は電話ボックスの
公衆電話で母に電話をかけた。

傘を持ってなかったから、
本当に嫌だったけど、
母に頼って、車で迎えに来てもらおうとしたのだ。
当然お金もない。
傘を買うなどもってのほかだった。

精神的に屈辱感を感じながら、
母に僕は頑張って電話した。
答えはNOだった。

「傘を忘れたお前が悪いんだろ」
とのことだった。

その通りである。
確かに天気予報を見てから僕は外出したわけではなかった。

僕が悪かった。

だがこれは僕の中には、
母に頑張って頼ったことだった。

普段は素直になれないが、
直接顔を合わせてない今なら頼ってみるか。。。

と決断したことでもあった。

だが、それは失敗に終わる。

やはり、両親なんてクソだと感じながら、
雨の中をびしょ濡れになりながら、僕は帰った。

おそらくとんでもない目をしていただろう。

涙が流れているのか？雨粒が流れているのか？

わからないほどに
僕の間からは水が流れていた。

非常に悲しかった。

しかし、当時悲しいなんて感情は封印していた。

湧き上がってきても、

無理やり心の奥底に閉じ込めていたのだ。

びしょ濡れで家に帰っても僕は何も言わずに、
部屋に戻った。

リビングに行ったら、
「いつの間にか帰ってきてたの？」

と言われる。

俺の存在はなんなんだろう？と思う。
心にぽっかり穴が開いたような状態だった。

後で理由を聞いたら、
ガソリン代もかかるし、めんどくさいとのことだった。

母は全く悪びれてなかった。

なぜなら、

「ケチ」だからである。

ケチなのが当たり前なのだ。

当たり前のことをやったのだ。

悪びれることなんてあるわけがない。

息子の体調 < ガソリン代

この不等式が成立してしまっていたのだ。

だからこそ、

僕の中で雨で濡れたら風邪を引くなんて概念は吹っ飛んだ。

こんなことは日常茶飯事になったので、

僕は雨で濡れることがあっても、

「AHAHAHA、生物は海から生まれたんだ、雨で濡れることなんてなんてことはねえ」

こんなことを言う子供になってしまった。

今このレポートを書いていると思うが、

本当に僕は素直じゃない人生を歩んできたんだなとまじまじと感じている。

素直じゃないよ。本当に。ひどいものだ。

欲しいものが欲しいと言えないんだよ。

経済的に優しくされると罪悪感を覚えてしまう。

本当に悪いことをした気分になった。

友達のお母さんにおごってもらっても、

後で請求されるんじゃないかとびくびくしていた。

「そんなことするわけない。」

その通り。そんなことするわけない。

けど、ケチな価値観は僕に恐怖感を与え続けた。

そして素直じゃない価値観はあらゆる面で僕に悪影響を与え続ける。

価値観というのは、

非常に恐ろしい。

内面から人を変えてしまうのだ。

成功できない価値観に染まっていたら、

成功できるわけがない状態にしかならない。

実際に僕も

貧乏であることにある種の誇りを持っているような状態になった。

なにもかもケチに達成できることに満足感を感じているのだ。

例えば僕は小学生の時は、

年から年じゅう半袖半ズボンだった。

正直寒かった。

母がお下がりかなんかで貰ってきた服だ。

非常に僕は不満を感じていた。

だが、案の定、不満など言わなくなっていた。

まず寒い。

種類もない。

けど、逆に僕は、

「俺は寒くねーよ。寒いのか？雑魚じゃん」

と思っていた。

自分を肯定していたのだ。

素直な感情を無視してうそぶいていた。

もし、本当はあったかい服が欲しい。

なんて発言をしたら僕のアイデンティティーは消滅してしまう。

だって、発言しても手に入らないのだから。

発言しても否定されるだけだ。

なら最初から求めない方がまだ。

このようなマインドセットになっていた。

誰だって自分を否定したくない。

俺は寒くない。

と思うことによって、自分を保っていた。

しかし、それによるダメージは大きかった。

可愛くないのだ。

あまりにも可愛くない。

可愛くないし、喜ばないし、
そりゃー孤立に向かう。

小学生の時は、
友達がいなかったわけではなかったけど、
自分の敵のような人はどんどん増えていった。

けど、やはり素直じゃないから。
そんなことは別に平気だと言いつづけた。

全く他人になびくことはなかった。

流れを明示すると非常にわかりやすい。

お金ない

→ケチになる

→それが原因で友達と喧嘩

→友達とかいなくても平気な自我形成

→より友達から孤立

→もはや友達欲しいなんて言えるわけもなく後に引けない状態

こんな感じだろうか。

自分のいった発言に苦しむ。
だが、前言撤回できないので、
余計にドツボにはまる。

といったところだろうか？

プライドもどんどんどんどん高くなってくる。

無駄なプライドだ。

素直になれないのもプライドのせいだ。

そういった意味で、
僕はケチのせいで、

もともとなかった金銭的な自由に加えて、

友達との交流といった意味での
精神的な自由も失い、

ケチであるために努力を重ねて、

身体的な自由も失った。

寒いし、毎日不満だし、イライラだし、ろくなことはない。

車は贅沢だつという固定観念が出来上がったために、
やたら自転車で移動したりする。

おかげさまで

体力と気力だけはついた。。。。

ママチャリで1日50キロとか普通に走ってた。

あの頃の自分は、本当どうかしてた。

hahahahaha…苦笑

中学になっても素直じゃない自分は変わらないし、
当然貧乏も変わらない。

それが原因で、クラスメイトと喧嘩したりはしょっちゅうである。

僕の貧乏はマジで闇そのものだった。

特に僕が住んでいたのは東京だったが、

東京都下の中でも超田舎の部類のエリアで、

同調圧力がすごく激しくて、

ちょっとでも違うことをやっている人がいると、

すぐに仲間はずれの対象になった。

実際僕も

TVゲームを持っていないだけで、

省かれる対象になった。

僕は、TVゲームを持っていなかった。

それだけで仲間外れになった。

金がないんだ。

TVゲームを買うことができない。

仕方ないから興味のないふりをしていた。

そうしたら、

友達だと思っていた人には陰口を言われ、

嘘をつかれるようになり、

物を盗まれたりするようになった。

僕は、ケチなので、
物を盗むやつはどうしても許せなかった。

特に、僕の中学校は超荒れていて、
バイクで学校に来るやつや、
普通に酒を飲みまくったりするやつや、
万引きをすることをカッコいいとしてる価値観の中学校だった。

僕も何度も、
リーダー格みたいなやつに万引きを強要されることもあったが、
僕はどうしてもそれはできなかつたし、
やろうとも思わなかつた。

それが原因で、
チキンだと罵られようと、

ボコボコにされようと、
関係がなかつた。

僕が超ショックだったのは、
幼稚園の頃から知っていた、

いいやつだと思っていたやつが、

近所のおばあさんがやっている駄菓子屋から、
駄菓子とかをかたっぱしから盗んでいた時だった。

グループでみんなで盗んでいた。

僕は貧乏なのもあり、
お金の価値を知っていたし、その重さも感覚的に感じていた。

10円のうまい棒を売って、
「ありがとう、また来てね」と
言っているおばあさんからどうしてそんなひどいことができるんだ。

と思った。

しかもそいつは、
近所ではいい子だと思われていた。

僕自身もすごいいいやつだと思っていたし、
スポーツ万能でそこそこ勉強もできると完璧に近かった。

そんなやつでもやるんだとショックだった。

そんな風に、万引きなんて日常茶飯事だった。

僕のものも平気で盗まれた。

ペンも盗まれたし、ゲームも盗まれたし。

僕はどうしてもそれが許せなかった。

ゲームもペンも

僕が大好きだったばあちゃんが買ってくれたものだった。

ばあちゃんは、

僕が常に「金がない金がない。」

と言っているから、見かねて買ってくれたり、

お小遣いをくれたりした。

それを盗んだのだ。

許しておくわけにはいかなかった。

僕が学校を休んで、

筆箱を机の中に入れておいたら、

次に学校に行く時は、筆箱の中は何一つ入ってなかった。

そして、平気で僕のペンを使っているヤンキーグループがいた。

「返せよ」

「は？俺のだよ、死ねよ。きもいな。」

「俺のだよ返せよ」

といたら、ぶん殴られて、
結局何もかえってこなかった。

僕はブチ切れて、
みんなに「あいつが盗んだよね？」
と聞いても首を縦にふる物はいない。

そんなことは僕の中学では日常茶飯事で、
僕に限った話ではなかったが、

それでも許せんかった。

だから、先生に聞いてみた。

そうしたら特に何も解決策の提示はなかった。

と同時に先生なんてクソだなと思った。

こんな連中に税金をうちの親は払ってるのか。

と思うと、本当に悔しかった。

暴力に僕は負けた。

叩きのめされたのだ。

と同時に僕は号泣した。

ばあちゃんに申し訳なくて仕方がなかった。

ばあちゃんだってお金に余裕があるわけでない。

じいちゃんは定年退職して、2人とも年金で暮らしていた。

孫を可愛がってくれて、せっかく買ってくれたのに、

なんで。。。

と思うと、涙が止まらなかった。

僕はその時のこともあり、

暴力で解決しようとする人間が本当に嫌いだ。

フェアプレーの精神もクソもない。

すぐに大人数で囲んで来やがる。

そうゆうやつらは、少人数だと雑魚だから余計に腹がたつ。

僕はその時のこともあって、

精神的にも肉体的にも、今は強くなった。

そういった意味も兼ねて、

空手などの武道をやるのはいいと思う。

心からお勧めしたい。

そんなこともあり、

暴力で解決することしか脳のない集団が集まる中学校が僕が心底嫌
になった。

だんだん僕は学校に行かなくなった。

学校に行っても物を盗まれるだけだし、

行きたくないと思った。

だが当時はそれさえも認めることができなかった。

それを認めるということは、自分の負けを認めるのと同義だったか

らだ。

そんな時だ。

たまたま近くに住んでいる友達が

自動車のプラモデルをくれた、

僕は中古おもちゃ屋で買ってプラモデルにはまった。

僕は学校に行かない理由を、

「プラモデルやりたいから。」

と言うようになった。

しかし実際の理由としては

プラモデルも嘘ではないけど、

やっぱり理由として大きかったのは、

学校に行くと、ろくなことがないということだった。

そして、中学2年の途中からほとんど学校に行かなくなった。

毎日

「腹痛い」

と母に告げて、学校を休んでいた。

僕はそのうち本当に腹が痛くなったし、
頭も痛くなったし、
気持ちも悪くなった。

頭痛薬を飲んで、吐き気止めを飲んで。

というのが続いた。

不登校になって、
最初は仮病を使っていて、
それを理由に生きていると、
本当に具合がどんどん悪くなってくる。

精神的なわだかまりも、
身体的な異常を生むのだ。

何もやっていないと、
頭がおかしくなるし、
学校を休む理由にもならなくなってしまう。

なのでプラモデルだけはやっていた。
何かをやりたかったのだ。

母はその時、
OLをやっていたので、
会社に行くまで寝るふりをして、
母が家を出たら、
プラモデルを組み立てやり始めていた。

毎日罪悪感と戦いながらも、
「これは悪いことではない。」

と思い続けながら生きてきた。

とはいったところで、
内面は僕以外にはわからない。

外見上は、
どうみても、単なる
不登校ニートにしか見えなかった。

それは両親の目にもそう映ったし、
誰からみてもそのようにしか見えなかった。

ただ1人僕を除いては。

だが、そんなことは御構い無しだ。

世間的に見たら僕は、

ケチから始まり、

孤立して、

不登校までなってしまったのだ。

母はそれに参ってしまっていた。

僕としては中学3年で

身体はもう165センチ以上あったので、

父親も怖くないし、

家に引きこもってやりたい放題やっていた。

誰もそれを止める人はいなかった。

けど、毎日なんとなくやばいと思って人生を歩んでいた。

学校に毎日行かずに、家でプラモデルを作って遊んでて。。。。

とてつもない、罪悪感を感じながら生きてきた。

さすがにどんなバカでもやばいことはわかる。

けど、その世界が楽すぎて、

自力で抜け出すことはできなかった。

ただただ、好きな時に寝て、
好きな時に飯をくらい、
好きなようにプラモ作って走らせるだけだ。

精神的には、辛かったが、
だからといって、
何をやればいいのかわからなかったし、
「なんとかなる」
と言って、自分をごまかしていた。

僕は外部との交流を取れなくなっていた。
外に出るのも怖くなってしまっていたのだ。

僕はケチな価値観に染まったことによって、
友人との交流を自ら捨てて、
誰のことも信じることができなくなり、
両親にまで嘘をついて生きていくことになったのだ。

精神的にも身体的にも僕は孤立した。
いずれにしても根元にあったのは、

ケチな価値観だった。

これが僕の小中学校の生き方そのものだった。

ケチだとすべてを失う。

何一ついいことはない。

貧乏だったら、僕はお金を得るための手段を考えるべきだった。

だが、僕は現状に不満を垂れただけで、

特に何もすることはなかった。

僕はその後、運命的な出会いを果たして、

高校受験を目指すようになる。

その結果。

高校に奇跡的に合格することができた。

奇跡と呼べるような出会いだった。

成績も校内で最下位で、

学校に行くこともできなかった僕を
その出会いは救い出してくれた。

これが僕の人生での大きな出会いの1つだ。

その出会いとは、
ある塾の先生との出会いだった。
その先生は母が連れてきた。

不登校で、
14歳にして、毎日顔色が悪い僕を。
社会すべてを恨んでいるような顔をしていた僕を。
見かねた母が連れてきたのだ。

その先生と出会って僕は変わった。
世の中には信じてても良い人間はいるんだなと思った。

その先生は、綺麗事抜きに僕に、
社会のことを教えてくれた。

「ヤンキーだらけの学校が嫌なら、
抜け出さなければならない。

それをやるか、やらないかは、お前次第だ。

少なくとも、

目標を目指せる学校に行けば、

絶対的に不条理な否定は減る。

いきなり、顔面をぶん殴られることもなくなる。

お前は少なくとも、

運の良い方ではないかもしれない。

だが、その運の悪さは、

たかだか勉強するだけで解決する。

良い高校、良い大学に行けば、

世間の評価は変わる。

それはのちの収入にも影響する。

親がケチだとほざいても何も状況は変わらない。

日本は資本主義社会だ。

地位を持っているやつ、金を持っているやつ、

すなわち、頭がいいやつが勝つ。

うまく生きていくやつが勝つんだ。

そして、そのためには、

学歴を得ることは最も簡単な手段だ。

なら、そっち側に移らなければならない。

家で、だらだら生きていても、

何も変わらないだろ。

勉強しろ、結果でいろんな人間を見返せ。

ケチなことに文句を垂れていても変わらん。」

僕は先生から、

勉強することの重要性を教えてもらった。

と同時に人生で大事なことをたくさん教えてもらった。

受験のこと、お金のこと、人のこと、信用のこと。

僕は、この先生のもとで学べば、

このクソみたいな人生を終わらせることができるんじゃないかと、
希望に満ちあふれた。

そして、金のない世界から抜け出せるんじゃないかと思った。

有名な学校に行って、
金持ちになってやる。
僕はこれを誓った。

僕は、その時から受験生になった。
中学3年の6月のことだった。

だが、最初から、
順風満帆に進んでいったわけではない。

いくら勉強しても、
何もわからないこともあった。

大量のプリントをやり込んだ。

本当に勉強が何もできないのだ。

助動詞とは何かもわからない。

I can fly.

という文章を読んで、

なぜ動詞が2つと発狂したものだ。

勉強面はもちろんだが、

先生に感謝したのは、精神的な面が大きかった。

時には激怒されることもあった。

「クソガキが社会を舐めるのもいい加減にしろよ。」

と言われたこともあった。

本当にその通りだった。

どうしようもなかった僕を、

母にも父にも誰にも変えられなかった僕を、

先生は変えてくれた。

人間を信じてもいいんだなと思わせてくれた。

僕はそこに価値があると思っている。

僕は孤立から救われた。

その前から、母は僕の味方だとは言ってくれていた。

もしかしたら、本当の意味で孤立ではなかったのかもしれない。

確かに虐待を受けていたわけでもないし、

どこかに僕は売られたわけではない。

そこまでひどい親ではなかった。

だからといって、母からの僕に対する愛情を理解するのは、

当時の僕にとってあまりに難しいことだった。

親なんて糞食らえだと思っていたし、

愛された実感など一切なかった。

そんな時だ、

僕は、先生から熱を感じた。

この人は僕に対して本気で向き合ってくれている。

今の時代に、

本当に子供に対してブチ切れしてくれる先生がどれくらいいるだろう

か？

そんなリスクを冒さずとも、

お金を稼ぐことができる。

生活することはできる。

だが、その先生は、

リスクを冒して僕に向き合ってくれた。

僕はそれが嬉しかったんだと思う。

精神的な孤立から解消された瞬間だった。

僕は今では、

母には感謝している。

母は先生を連れてきてくれた。

母がいなければ、今の僕はない。

だが、いくら親が、

子供に対して、

口では、

「愛している」

「お前のことを思って言っている」

などといっても、

現実的にそのために何かをやっていなければ、
子供が親の気持ちに気づくのは難しいと思う。

少なくとも、

当時の僕には、それに気づくことはできなかった。

それに対して、

先生は僕のためにいろいろ動いてくれた、
不登校でも行ける高校を探してくれたりもした。

感謝しかなかった。

僕は中学3年の頃に、

その先生は高校へ合格する目標を提示してくれて、
僕はそれを目標にして生きることができるようになった。

なんの生きる目標もなく、

ケチで、社会から孤立した僕に目標をくれたのだ。

僕は本当にその先生に感謝している。

のちに就職、転職を経験して、
人生を歩む中でライフスタイル考えるようになり
ハードルを下げた、その勉強法を持って、

新しい自由を3ヶ月ちよいで手に入にした僕から見ると、

決して

中学生の不登校の時に勉強したやり方は、
効率が良いとは言えなかった。

もっともっと効率の良い勉強の仕方は存在するし、
昔を振り返ると、もっと早く知っていれば良かったとも思えたが、
今はそのおかげで、ものすごく効率よく勉強ができている。

だが、その時の僕にとっては、
非効率なやり方でもスタートを切ることが必要なことだった。

当時の僕は、
効率もへったくれもない。
何もわからなすぎるし、
やめないことが重要だった。

そもそも生きる意味があるのだろうか？

と考えていたレベルだったから。

高校受験という形で、

生きる意味を提示してくれたのだ。

十分すぎるじゃないか。

不登校なのが幸いした。

本当に毎日勉強していた。

その結果

僕は先生のもとで、

受験勉強をし、

見事第一志望の高校に合格することができた。

そうしたら、

小学校中学校とは完全なる別世界が展開されていた。

暴力なんてそこには一切なかった。

目標を目指せる高校に行くことができてために、
窓ガラスが割れることもなければ、
授業中に竹刀で頭をぶん殴られることもない。

万引きをカッコよさの象徴として讃える風習もない。

みんな静かに勉強する学校だった。

僕はそこで、孤立から脱却することができた。

けども、

やはり、ケチな価値観は根深かった。

そこそこ頭の良い高校というのは、

やはり、親もそこそこ頭が良い確率が高い。

それは遺伝的性質では全くなくて、

親の教育が良いからである。

もつというと、

親が教育を重要視している「価値観」だからである。

そして、教育を重視している家庭は、
そこそこお金を持っている可能性が高い。

事実、友人は、
超金持ちという人は少なかったけど、
僕の家みたいにケチな家は皆無だった。

そこでまた僕のケチな病は発病した。
羨ましいと言えないのだ。

友人が平気で、
金を使っている。

それにたいして、
「いいな」と素直に感じるのではなくて、
卑屈な感情を心の中で抱いていた。

友人の中には、

別荘を持っている人もいた。

家に馬を飼っている友達もいた。

もう貧乏家庭に生まれた僕からしたら意味がわからない。

次元が違いすぎて、どうしようもない。

僕からしたら、

全員金持ちだった。

僕みたいに毎日190円のラーメンしか食べなくて、

「ワカメはお腹膨れるよ！！！！」

で強がって、ドヤ顔をしているやつもいなかった。

あまり、食事に金を使えなかったこともあり、

異次元なくらいガリガリだった。

今は僕は170センチくらいで、

75キロちょいだが、

当時は、52キロしかなかった。

本当にケチなせいで、
いろいろなものを失ったと思う。

20キロ以内なら、
僕の中で自転車圏内だった。

極端なくらい価値観がねじ曲がっていた。
おかげで時間はなくなり、
精神的にも苦しい思いばかりをした。

だけど、まだ高校になったらマシだった点が1つある。

アルバイトができるということだ。

僕はアルバイトを始めた。
僕は一気に稼ぎたかったために、
長期休みをほぼ全てバイトに突っ込んだ。

さっさとお金が欲しかったために、
時給が良いバイトを選んだ。

条件が悪くてもそんなことはどうでもよかった。

その結果僕はパン工場で働くことを選んだ。

だが、そこあったのは、地獄だった。

本当にきつかった。

マイナス5度の部屋でのイチゴのヘタ取りと

5,60度の部屋でのフランスパン管理

1日1000個ものカステラのひっくり返し作業

奴隷そのものだった。

だがしかし、何度でも言うが、

ケチな価値観は根深い。

僕はこれが「働く」ということなんだ。

と捉えた。

毎日死んだ魚のように、
思考を停止させて、工場に出勤する。

そこで、ルーティン化された作業をやる。
辛い。しかし、辛いのが当たり前だとみんな言っていた。

本当に誰でもできる仕事である。
小学生でもできる。

これがまがりなりにも先進国の人間がやらなければならない仕事なのか？と思った。

だがその時も、違和感よりもケチな価値観が勝ってしまうのだ。

僕はお金がない。
買いたいものが買えない。

金が欲しい。金が欲しい。

そう思ったために、
どう考えても誰がやっても同じような仕事を、

毎日黙々とやってた。

なんのためか？と聞かれたら、
本音では、「お金のため」以外の答えはない。

けど、口では、
「経験になるよ」
とか綺麗事を言っていた。

経験になんかなりやしない。
カステラをひっくり返すことが何の経験になるだろうか？

イチゴのヘタを取ることがなんの経験になるだろうか？

1日や2日間ならいい。
だが何ヶ月もやる仕事ではないだろう。

と今なら思う。

僕は工場で働いて、1年間くらいは、
パンを食べる気にもなれなかったし、

特にカステラの匂いがダメだった。

カステラをひっくり返している時に、

どうしても甘い匂いを嗅がなければならない。

それが8時間だ。

毎日嗅いでいると、そりゃ一飽きる。

飽きないわけがない。

カステラと連動した工場の風景が脳裏に焼き付いているのだ。

それも含めて、

当時は、

お金を得るっていうのは、

本当に大変なことなんだなと感じた。

そして、毎日肉体労働なので、

劇的に痩せた。

体重が毎日減っていった。

休みの日の全ての時間を工場に注ぎ込んだ。

それで僕は時給450円稼いでいた。

$450 \times 8 \text{時間} = 3600 \text{円}$

これが僕の毎日の収入だった。

初めてのバイト代は、嬉しかった。

3600円とかこんなにもらっていいのか？

と最初は思った。

けど、時間はない。

精神的にも毎日辛い。

「また同じことを8時間やるのか。。。。」

「今日もまた冷蔵庫に突っ込まれるのか。。。。」

それが毎日。

気が狂わないほうがおかしい。

実際気がおかしくなってる人はたくさんいた。

あまりに日常茶飯事すぎて、

誰も気を留めていなかった。

僕はひたすら、我慢した。

だってこんな大事なお金のために働いているんだ。

そりゃー我慢しなければならない。

毎日毎日同じことの繰り返しでも、

何も考えないで稼ぐことができる。

そして、1日が終わると、3600円がもらえる。

そして、また明日同じ工場に来て、

また3600円のために1日を注ぐ。

高校に行きながら何をやっているんだろうと思ったりもした。

だけど、そんな感情は捨てた。

「これがお金を稼ぐってことだ！！！！」

そう思わないとやっていけなかった。

周りの友人は、

親が金持ちで、お小遣いなんて貰えばいいじゃんと言っていた。

「コバタカはなんでそんなに働いてるの？金の亡者かよ」

などと言われたりした。

こいつらに俺の気持ちはわからない。

と思った。

金がない悲劇をこの人たちは知らないんだと感じた。

だが当時の僕は、
自分とは縁もゆかりもない。
義理も何もない。
会社の工場に、

- ・時間
- ・精神
- ・身体

をお金のために全てを投げ出していた。

今思えば、金の亡者以外の何物でもない。

そうだ。俺は金のためだけに働いていた。

これが全てだ。

経験のためになんか働いてない。

全てを工場に差し出していたのは、
他でもない金のためだった。

それ以外になかった。

その後は、進路の時期になり、
就職することを希望していました。

僕は高校受験の時に誓ったように、
お金を稼ぐために大手企業を志し、

就職希望先は、
不勉強、志望動機も薄いと判断され
撃沈します。

貧乏なので
就職しないといけないと思ったので、
バイト先でもあったスーパーマーケットに就職する。
というか、それしか選択肢がないと思っていたので。

そう考えると「ある意味洗脳教育って怖いなあ」
と思います。

最近でこそ働き方改革なんかが騒がれていますが、
日本人の多くは、洗脳教育のせいで
今だに「働くための人生」を過ごしています。

「幸せになるための人生」ではなく
「働くための人生」です。

で、僕は、第一就職希望に失敗し
働くための人生の始まりスーパーマーケットに就職した。

配属された精肉部門は、職人氣質だった。
本当にきびしかった。

牛、豚、鶏を扱い、鮮度を勝負とし肉の塊を商品化
うす切りにしたり、ひき肉にしたり、焼肉用、生姜焼き用、
しゃぶしゃぶ用、ステーキに加工する作業

少しミスをすれば怒鳴られ、店内放送するマイクで殴られ、
馬鹿にされる。

不協和音を奏でることになるものだった。

だがしかし、サービス残業というものは
ケチな価値観は根深い。

「月45時間以上の残業はしないという

労使協定になっていたらしく、残業は認めていない。
決まりだから守りなさい」と言う事になっていて、

タイムカードを切って店に残るのが当たり前でした。

だがその時に、違和感でいた僕は、
バブル景気ということもあり友達の紹介で
大手企業メーカーで働くようになりました。

そこにいたのは、
以前とは、比にならないほどの残業の嵐だった。

毎日、今日は、2時間、4時間とか
徹夜とか、休日の残業時間を申請するわけですが、
現実の残業時間は100時間を超えるのが当たり前の世界だった。

僕は悔しかった。
ただただ、悔しかった。

そこにいた人たちは、
サービス残業を経験してきた人は本当にいなかった。

お金はある程度

あるのが、当たり前の価値観の人たちばかりだった。

カルチャーショックである。

昼の休憩時間に友人に

僕が高校生時代にしていたパン工場のバイトの話をしたら

その友人の大学時代は

家庭教師のバイトしたことがあるそうだ。

時給1000円貰える仕事だったらしい。

当時の僕にとっては、非常に高いと思った金額だ。

僕がパン工場で必死の思いで、

働いても時給450円だったけど、

家庭教師は座っていながら自分の知識を喋るだけで、

1000円貰える。

時給2000円もらえる家庭もあった。っていう。

衝撃である。

自分がどれだけケチの価値観に染まって生きてきたかわかった気がする。

高学歴だと、

座ったままの仕事でも、

高額なフィーがもらえる。

世界を変えるところも違うんだなと素直に感心した。

だが、毎日僕は働いていた。

時間を代償に、お金を求めて働いていた。

お金は以前より増やせるようになった。

だけど、時間は全て消えていた。

その後、マネキン人形の配送員、

医療酸素ガスの配送ドライバーと転職した経験もある

(上記2つの転職の話をするとう長くなるので、また別の機会に)

その後、転職が訪れた

それは、以前に勤めていた会社の後輩と飲む機会のこと、

その出会いは、脱サラ起業家として道を開いてくれることになる。

そして、僕は、2003年の1月から僕はビジネスを始めた。

その開業1年目の年収840万、平均月収70万になった。

僕はその出会いの1年後。

平均月収が100万円を超になった。

お金と気合を投資して稼ぐことができたのだ。

はっきり言って、なんだったんだと感じた。

両親はどうしてあれほどまでにケチだったのか？

と感じた。

と同時に、

知識というのは恐ろしいと思った。

知っているか、知らないか。

そして、それを学べる環境にいるか？

いないかで全てが変わってくる。

お金に対する感覚が全然変わってくるのだ。

僕はその後、次々と実績を上げることができた。

それはひとえに、学べる環境だと思っている。

僕は幸運にもビジネスの原理を学ぶことができたのだ。

原理とは、本質である。

原型の理だ。

元の形を知った上でビジネスをやるのと、
数打てば当たるだろうと思いながらビジネスをやるのでは、
天と地の差がある。

それを学ぶことができたのだ。

その後、僕は更なる運命的な出会いを果たすことになる。

それは直接的に僕の人生を大きく変えた。

靴に水が浸水するほどの大雨の夕暮れどきだった。

その出会いは、僕に

インターネットビジネスの道を開いてくれることになる。

その青年起業家は、2013年からインターネットビジネスを始め

その1ヶ月後の月収は120万円になった。というのだ。

僕の価値観は完全に崩壊した。

今まであれだけお金にケチだった世界観はなんだったんだと疑うし

かなかった。

時給1000円計算だと、1200時間働かないと稼げない金額だ。

1日8時間労働をしても、150日毎日労働してやっと到達する。

意味がわからない。

自分でやってみても異次元すぎて意味がわからなかった。

青年起業家は、何から収入を得ているかというと、

インターネットビジネスだ。

インターネットを使って、ビジネスをしているのだ。

毎日収入が10万円以上ある。

特に毎日激務をこなしているわけではない。

好きなものを仲間と食べて、

1時間ほど作業をして、

この収益が生まれている。

日によっては、

全くパソコンに作業せずとも利益が上がる日もある。

確かに働いていないが、

代わりに、

インターネットのシステムが価値を人々に提供して稼いでいる。

インターネットというのは、本当に便利なものだ。

人間が働かなくても分身のように働いてくれるのだ。

だからこそ、

好きなことしながらでも稼ぐことができている。

年齢も何もかも関係がない。

そして、専門的なスキルが必要なわけではない。

僕は未だにパソコンの専門的なスキルはない。

必要ないのだ。

触っていじることができれば、

稼ぐことはできる。

今は非常にユーザービリティの充実した、

ツールがたくさんある。

少し分からなかったら、

Googleの検索エンジンで調べればいい。

僕も最初は、

ネットビジネスをやる前は心配していた。

「プログラミングとかできないし。。。」

だが、そんな心配はいらない。

プログラミングなど知らない。

メールが出せて、

Wordが使えるればなんの問題もない。

どんな人でもメールくらいは使ったことはあるだろう。

他のツールは

少しずつ覚えていけばいい。

確かに

昔の僕は、

すぐに新しいものを毛嫌いしていた。

「別に今あるものでいいし。めんどくさい。」

このようなことを考えていた。

また、ケチマインドである。

本当に損をしていた。

少しめんどくさいことをやらないことによって、

後々超めんどくさいことになるのだ。

僕にとってそれは日常茶飯事だった。

だが今は違う。

今は当時のケチマインドを後悔している。

それもあって、

常に新しい世界入るための投資は惜しまない。

それは情報に投資する場合もあるし、

ツールに投資する場合もある。

ネットビジネス始めて初期の頃は、

いろんなものに投資しまくった。

セミナーに行ったり、

コンサルを受けたりもした。

やっぱり、ショートカットは大事だなと感じる。

僕は今、

ボイストレーニングの先生から声の指導を受けているが、
やっぱりプロから指導を受けると、
圧倒的に早く成長できることを感じる。

昔は独学が全てだと思っていたが、
どう考えてもコストパフォーマンスが悪いことを知ってしまった。

お金は単なるツールだ。

お金を使って、時間を短縮できるなら
僕は喜んで使うし、
そこでケチるよりも、

その時間を使って、
稼いだほうが早い。

お金を使えば、
時間も増えるし、
迷わないで済むので、
精神的にも楽になる。

迷わないことは、
身体的な自由にもつながる。

迷っていると、
脳みそに余計な情報が入ってしまうので、
身体の動きが遅くなってしまふ。

人間の行動は、
脳みそに制限されているので、
脳がクリアにならないと行動することもできなくなってしまう。

だからこそ、迷っていると、ろくなことにならないと強く思う。

だからこそ、
僕はわからないものはお金を払って人に聞いてしまっている。

何度も後悔している。
迷って迷ってケチって。

さっさと人に聞けばいいものを。

それで、いつの間にか

2週間くらい経ってしまっていたりする。

本当にもったいなかったと思う。

2週間というのは、

かなりの長さだ。

2週間正しい知識で行動していれば、

世界は大幅に変わってくる。

本当にビジネスの世界は、

入ったもの勝ちだなと感じる。

僕はビジネスの世界に入れたから良かったが、

昔のように雇われるのが当たり前前の価値観のままだったら、

未だにケチなマインドで一生こき使われていたと思うと、

ぞっとする。

これからは、格差がどんどん拡大していくし、

日本そのものの力が弱くなっていくだろう。

僕1人を例にしても、
年収1000万を切らないのだ。

こんな人がどんどん出てきても不思議はない。

このような現象はどんどん発生してくるだろう。

この時点でかなりの格差が発生している。

年収1000万を超えるのは、
平均4%だ。

1億人の中の400万人ということだ。

しかもそれは、
あくまで平均である。

まともに働いていても、
その世界に入ることはかなり難しいし、
これからどんどん難しくなる。

自分で決意して、稼ごうと決めた人間だけが、
報われる社会だ。

綺麗事だけは言ってもらえない。

日本は資本主義社会であり、
お金で99%のことが解決してしまう社会だ。

人生お金じゃないという人もいるが、
それは一定以上の収入がある人の話だ。

出会いが欲しくても、
お金がなければ、フットワーク軽く出会いに行くこともできないし。

美味しいものを食べたくても、
お金のために毎日働いていると、
そもそも食べに行く時間さえない場合さえありうる。

そういった悩みもお金さえあれば解決する。

僕はケチな時には見えなかった世界を今はたくさん見ることができ
ている。

例えば、

本を読みまくって、

それを自分のビジネスのフレームに当てはめて、

さらにそれを市場で実際に試してみて、

収入が上がる時の快感は何事にも代えがたい快感だ。

情報にお金を投資して、

さらにそれが大きなお金になってくる感覚は、

この世界に入って大きく得られたものの1つだと思う。

それはサラリーマンでは絶対に得られない領域だ。

学べば学ぶほど、収入が増えていき、

そして、関わる人も変わってくる。

その結果

いろんな人と会うことができるようになった。

お金に全く不自由していない人たちともたくさんあった。

僕がケチな価値観に染まっていた時には

絶対に会うことはなかった人たちだ。

本当につくづく感じていることだが、

「周りの人間5人の平均年収が自分の収入になる」

とはよく言ったものだ。

人間の行動は価値観に左右される。

稼げない価値観に染まっていたら、

それは稼げないし、

稼げる価値観に染まり、

正しい行動を取れば、

自ずとお金は集まってくる。

それは本当に感じる。

僕のように圧倒的ケチな価値観に染まり、

ケチな両親を持っていると、

お金を稼げる情報は入ってこない。

自ら情報を遮断してしまう場合さえ僕にはあった。

自分とは違う価値観を認めないのだ。

だって昔は、時給450円で働いていたのだ。

「そんな稼げる世界があつてたまるか。」

と普通は思うだろう。

だが、実際存在する。

というか、存在しないわけがない。

できている人がいるということは、

やり方を真似れば、ある程度はできないはずはない。

しかし僕は決心して、
このネットビジネスの世界を入り口とした、
資本家たちの世界に入ることができた。

金持ち父さん貧乏父さんでは、

人を4つに分類していることもネットビジネスの世界に入ってから、
知った。

ビジネスオーナー

投資家

自営業者

従業員

だ。

お金に対して圧倒的に自由を獲得できるのは、
明らかに、従業員ではなかった。

僕はお金持ちとはあまりにも縁遠い場所にいたということを
今では、肌で感じる事ができている。

今回のこのレポートでは、
僕が貧乏で、ケチで、素直じゃなくて、
どうしようもなく、損をしてきた話から、

ビジネスで稼いで、価値観が崩壊し、
生きる世界が変わった話をしてきた。

そして、最後に大事なことを言いたい。

今の僕は、

両親に、恨みはない。

未だに

「好きかそうでないか？」

と聞かれたら、

「好き」と答えるのは難しい。

だが、昔の僕は親の愛情を感じるができなかったが、

母は学費は働いて稼いでくれたし、

父は不登校で甘えていた僕に学費を払う気などさらさら無かったの
で、

それだけでも母のおかげで非行に走らずに済んだと捉えることが
できる。

そして、不登校ながらも、

人生を変えてくれるような先生のことを思い出すことできたのだ。

十分運が良いじゃないか。と思う。

自分とは異なる価値観の人間と会わないと、

自分の殻は抜け出すことができない。

僕は運良く先生と会うことができた。

だが、それは母が連れてきてくれたからだ。

母がいなければ今の僕はない。

不登校のように引きこもっていると、

そんな出会いはなかなかないし、

あったとしても、

素直になれずに、

チャンスを受け入れる精神状態になることはできなかつただろう。

それを僕は無理やりにでも変えることができたのだ。

十分運が良い。

そして、

運とは

試行回数 × やり方 = 運

という数式で表すことができる。

正しいやり方で回数を重ねれば、

運が良くなる可能性は高いし、

逆に悪いやり方で回数を重ねると、

何をやってもうまくいかずに心が折れてしまうマインドになってしま
まう。

だからこそ、正しいやり方でやるというのは絶対的に大事なことで
ある。

汗水垂らすも、努力するのも大いに結構だ。

だが、その裏には、いくら汗水垂らしても、
成果が実らない人間もいるということだ。

悪いやり方でやって失敗しても、
愛情を受けていたり、
他で満たされていれば、
余裕の心を持って、
成功するまで頑張れるかもしれない。

何度でも頑張れるかもしれない。

だが、昔の僕のように、
愛情を感じず、

何も満たされずに、
それを強要するのはあまりに酷である。

誰だって、何かしら報われたい。
そう思うのは人として当然のことだ。

努力したことこそに意味が有るということを述べる人がいるが、
これこそ、悪しき価値観ではないだろうか？

意味のある努力になっていればいい。
だが、努力の多くは次に活かせない経験になってしまう。

そうなる、
ただ、失敗して終わりということになってしまう。

僕は、中学3年生にして、
綺麗事抜きの人間の本音を教わった。

いくら頑張っても、
何かしらで、実績を上げなければ、
良い評価をもらえることはない。

もし仮に、
不登校だけでも、
僕がいくら他人のことを思いやる気持ちがあっても、

それは人には評価されないのだ。

見られることさえない。

見るまでに至らないのだ。

赤の他人を評価するのは、
結局金や学歴などの何かしらの実績だ。

実績なんてなんでもいいのだ。

だが、何かしらの成功体験がないと人は興味を持ってくれない。

もちろん

関わっていれば、

面白い人もいれば、良い人もいる、人として立派な人もいることは
知っている。

しかし、それは見られるまでに至らないとわからないことだ。

評価対象になるにも、

最初の一步を踏み出しているかどうか分かれ目になる。

最初の第一歩さえうまくいけば、

そこからどんどん人生は好転し始める。

くすぶっているのであれば、

少しずつでもうまくいけば僕は良いと思う。

そのたった一つの成功体験が後々大きな変化を生むことになる。

僕が不登校の時なんて、

外に出ることさえ難しかった。

日を浴びると、すぐに頭痛になるのだ。

出たくもない。

だとしたら、外に出て、散歩するだけでも大きな進歩になる。

そんな風に考えることができれば、

心は救われる人は多いと思う。

最初の一步を踏まずして、富士山を登ることはできないのだ。

だが、日本の教育では、
富士山を目指させようとする。
ことが多い。

直接的にはそうは言ってなくても、
間接的にそれを感じ取ってしまう環境なのだ。

ここでも日本の悪しき教育の結果としての、
完璧主義がはびこっている。

この価値観は百害あって一利無しだ。

最悪なのは何もできなくなることだ。

だからこそ、
完璧主義を僕は否定しているし、

それに伴った正しいやり方を伝えている。

失敗してもそれはあくまで、
次に生かすためのものに
きちんとなるんだよということを言いたい。

僕は38歳でビジネスで稼ぐまで、
「なんで、こんな家に生まれてしまったんだ。
俺は心の中でうすうす運が悪いと思う」

などと思っていた。

だが、運が悪いことに恨んでも仕方ないのだ。
当然世の中には、格差がある。

それは、大手企業メーカーで働いたことあるし。
青年起業家から話を聞いたから、さらに感じた。

家が医者で何不自由なく欲しいものを手に入れた子もいれば、
両親が美男美女で生まれた時から可愛さが保障された女の子もいる。

それほどまで行かずとも、
いわゆる「普通の幸せ」を得ている人もいる。

家族仲良く美味しいものを食べる。

そういった幸せだ。

その時点で格差がないわけではない。

しかし、それは資本主義社会である以上当たり前のことだ。

資本主義社会とは、

資本(お金)が大事な考え方の社会ということだ。

〇〇主義というのは、

〇〇が大事な考え方であるということだ。

話を戻そう。

僕の家を見れば明らかだが、

それでなくても、

明らかに、

生まれた瞬間の運には差があるということだ。

その運の善し悪しによって、

幼少期の過ごし方が変わってくる。

だがそれを恨んでも仕方がない。

それは認めなければならないのだ。

その上で、

自分の運を良くするためには、

何をすればいいか？

を考えなければならない。

運が悪くだけで自分の人生を終わらせるのはあまりにもったいない
と思う。

僕自身人の人生を妬んで、嫉妬を心の奥底に感じるまま生きていた
時もあった。

38年間恨んでいた。

だが、それに何の意味が有る？

運が悪いなら、

運が悪いことさえネタにできるようにならなければ
本当に運が悪いままで終わってしまうのではないのだろうか？

それが一番悔しいことだし、
一番悲しいことだ。

僕は、母には感謝している。

僕は愛情を受けることができなかつた(と思っていた)からこそ、
僕の金に対する執念は並々ならぬものになったし、
様々な代償は払ったが、
お金に対して真剣に向き合うことができた。

そして、もがいていた。

母は、真意はどうであれ、
その時の僕に、助け舟を出してくれた。
その結果今の僕がある。

そして、もし幸せいっぱい家庭で育てていたら、
このように、自分を客観的に見て、

上を素直に目指す価値観になることはできなかつただろう。

上を目指すというのは、
自分の現状を否定して、
さらなるブラッシュアップをすること。

誰だって、否定はされたくない。
肯定だけされて生きていけたらこんなに楽なことはない。

だが、
自分とは一生のうちの一瞬でしか関わらないような
どこの誰かもわからない。
人間に否定されて
心が沈んでしまうくらいなら、
自分自身で、
自分の現状を否定して、今より良い生活を目指す方が、
僕は健全だと思う。

自分を否定するんじゃない。
誰かに否定される前に、

自分の「現状」を否定するのだ。

「苦労は買ってでもしろ。」

まさにこの通りである。と今でこそ思う。

素直に生きるというのはとても難しいことだ。

それは自分の弱さを認めなければならないし、

何かしら言い訳して生きている人生に終止符を打つ。

そういった覚悟を決めるということだ。

だが、少しずつでも、人生を好転できれば、

こんなにいいことはない。

幸い、

言い訳だけの人生を僕は止めることができた、

まだまだ至らないこともあるだろう。

だが、この考え方になれたのは、

「幸運」に他ならない。

言い訳を重ねていき、
ケチな自分のまま、
素直になれずに、
「お金なんてなくてもケチればいい。」

とっていたら、ろくな人生は歩めなかったと思う。

素直に、お金を欲しいと認めて、
そして、そのために行動する。

もちろん、お金を欲しいと思うからといって、
人に価値を提供せずに、お金を得ようとするのは間違っている。

それは最低の卑劣な行為だ。

だが、お金を得るために自分のスキルを上げるのは、
非常に生産的なことじゃないか。

学歴を得るのも、
スキルを得るのも、
アルバイトをするのも、
就職するのも、

お金のためである。

もちろんお金が全てとは言わないが、

「明日から給料半分ね」

と言われて、抗議しない人間がいるだろうか？

いるはずがないだろう。

本当はお金目的なのだ。

無論、それに伴った、

様々な副次的な得られるものはある。

だが、主目的はお金だ。

素直でいいじゃないか。

お金が欲しい。

認められたい。

結果が欲しい。

女が欲しい。

学歴が欲しい。

素直になればいいと思う。

そのために努力すればいいのだと思う。

正しいルートで努力を進めるために、

ガンガン自己投資すればいい。

お金も時間も投資するのだ。

そっちの方がよっぽど健全だ。

自分に嘘をつき、

他人にも嘘をつき、

顔色を伺うだけでは、

本当の意味で良い人生は訪れない。

お金を得ると本当にいい。

時間もお金で買えるし、

知識も金で買える。

それによって、効率的なルートも金で買える。

出会いだってある程度は買うことができる。

お金があると、
時間も増えるから、
たくさんの人と会う時間も作れるし、
そのためにかかるお金も捻出することができる。

よって、仕事の出会いだけではなくて、
恋愛のプライベートな出会いも充実するだろう。

改めて、
素直な自分になれたことを運が良いと捉えて、
母に感謝したいと思う。

そしてここまで読んでくれた読者のみなさんにも
感謝したいと思う。
こんな超長いレポートを読んでくれて本当に嬉しい。

僕の正直な思いを今回のレポートには書き連ねた。
正直向き合いたくない気持ちもあった。

だがそれは、

幼少期のケチなことを起因とする

悔しくて悔しくて仕方がない気持ちや

欲しいものを欲しいと言えない強情さ

その他にもさまざま認めたくない感情と

素直に向き合うことができる良い機会になった。

だからこそ感情をありのままに書いてみたのだ。

このレポートを読んだ人が、

昔の僕のような世界、

うまくいかになく、がんじがらめのような世界から、

抜け出すことができ、

そして、

素直になり、

自分の感情に嘘をつかないで生きてくれることを

心から願うばかりである。

改めて、

ここまで読んでくれてありがとうございました。

感想はいつでもお待ちしております。

コバタカ

月収500万稼ぐ思考を鍛える

コバタカの無料メールマガジンは下記リンクから登録できます。

[メルマガ登録はこちら](#)